J. Rakuno Gakuen Univ., **40** (1) : 51～62 (2015)

ガラテヤ書１章１節の修辞的機能
── パウロの使徒職の真正性 ──

小　林　昭　博*

Rhetorical Functions of Galatians 1:1
── On the Authenticity of Pauline Apostleship ──

Akihiro KOBAYASHI*
(Accepted 15 July 2015)

１．はじめに ── 問題の所在

ガラテヤ１：１は，他の真正パウロ書簡（ローマ書，Ⅰコリント書，Ⅱコリント書，フィリピ書，Ⅰテサロニケ書，フィレモン書）同様，この書簡の発信人であるパウロ自身の名がその劈頭にあげられており，パウロの名につづけて「使徒」の肩書きが置かれている。しかし，ガラテヤ書以外のパウロ書簡において，「使徒」の肩書きが付される場合には（ローマ１：1，Ⅰコリント１：1，Ⅱコリント１：1），パウロの使徒職が神的根拠を持つということのみが記されているのに対して，ガラテヤ１：１では，その使徒職の人的関与を二重に否定する文面が記され，その直後に彼の使徒職が神的根拠を持つものであるということを二重に肯定する文面がつづけられている。

以前より，ガラテヤ１：１における使徒職の真正性をめぐる記述は，この書簡の受信人であるガラテヤの諸教会がパウロの使徒職に疑義を呈していたことに対して，パウロが弁明ないし論争を展開しようとしていることに由来するものであるとの想定がされてきた。本論文では，その弁明ないし論争的性格に留意しつつ，ガラテヤ１：１が本書簡において果たしている修辞的機能を明らかにし，そこからさらに，その修辞的機能の背後に想定されるパウロの使徒職の真正性をめぐる歴史的問題に接近することを試みる。

２．ガラテヤ１：１の修辞的機能 ── パウロの修辞的戦略

2.1.「使徒」の修辞的強調

2.1.1. 発信人の肩書き

まずはガラテヤ１：１のギリシャ語テクストと私訳を呈示する。

1　*Παῦλος ἀπόστολος οὐκ ἀπ' ἀνθρώπων οὐδὲ δι' ἀνθρώπου ἀλλὰ διὰ Ἰησοῦ Χριστοῦ καὶ θεοῦ πατρὸς τοῦ ἐγείραντος αὐτὸν ἐκ νεκρῶν*

1　パウロ，使徒，人々からではなく，人によってでもなく，イエス・キリストと彼を死人たちのなかから甦らせた父なる神による

ガラテヤ書の書き出しは[1]，ギリシャ語原文では「パウロ」（*Παῦλος*）であり，その直後に「使徒」（*ἀπόστολος*）の語が置かれている。そして，「使徒」の語を修飾する形で，「人々からではなく，人によってでもなく，イエス・キリストと彼を死人たちのなかから甦らせた父なる神による」（*οὐκ ἀπ' ἀνθρώπων οὐδε δι' ἀνθρώπου ἀλλὰ διὰ Ἰησοῦ Χριστοῦ καὶ θεοῦ πατρὸς τοῦ ἐγείραντος αὐτὸν ἐκ νεκρῶν*）という説明句がつづいている。

書簡の発信人の名に肩書きや称号を添えることは，ギリシャ・ローマ世界の書簡形式には通常は認められないが，ユダヤ世界の書簡形式には広く確認できるものであり[2]，パウロはユダヤ世界の書簡形式に従って，自らの名前に様々な肩書きや称号を付しているものと考えられる[3]。だが，ユダヤ世界の書簡

[1] パウロ書簡の前書きの定式については，拙論「挨拶の文化的影響 ── *χάρις ὑμῖν καὶ εἰρήνη* の文化的背景」『神学研究』57 号，関西学院大学神学研究会，2010 年，29-39 頁を参照。

[2] エズラ７：12，ダニエル３：31（口語訳４：1），６：26，Ⅰマカバイ 12：6，20，13：36，14：20b，15：2b，Ⅱマカバイ１：1，10b，９：19 参照。

[3] 詳しくは，拙論「挨拶の文化的影響」31-32 頁参照。

* 酪農学園大学農食環境学群循環農学類キリスト教応用倫理学研究室
Christian Studies and Applied Ethics, Department of Sustainable Agriculture, College of Agriculture, Food and Environment Sciences, Rakuno Gakuen University, Ebetsu, Hokkaido, 069-8501, Japan

の発信人に付される肩書きは，エズラ7：12「アルタクセルクセス，諸々の王の王」(אַרְתַּחְשַׁסְתְּא מֶלֶךְ מַלְכַּיָּא)，Ⅰマカバイ12：20「アリオス，スパルタ人たちの王」(Ἄρειος βασιλεὺς Σπαρτιατῶν) といったものであり，ガラテヤ1：1のように，発信人の肩書きに長たらしい説明を加えるものは見当たらない。

2.1.2. ガラテヤ書と他のパウロ書簡との比較

しかしながら，パウロ書簡において，パウロが自らに添える肩書きは，通常の書簡形式から逸脱するものも多く，参考として，パウロ書簡の年代順に発信人の部分のみを抜き出してテクストをあげてみよう。

Ⅰテサロニケ1：1
Παῦλος καὶ Σιλουανὸς καὶ Τιμόθεος
パウロとシルワノとテモテ

ガラテヤ1：1
Παῦλος ἀπόστολος οὐκ ἀπ' ἀνθρώπων οὐδὲ δι' ἀνθρώπου ἀλλὰ διὰ Ἰησοῦ Χριστοῦ καὶ θεοῦ πατρὸς τοῦ ἐγείραντος αὐτὸν ἐκ νεκρῶν
パウロ，使徒，人々からではなく，人によってでもなく，イエス・キリストと彼を死人たちのなかから甦らせた父なる神による

Ⅰコリント1：1
Παῦλος κλητὸς ἀπόστολος Χριστοῦ Ἰησοῦ διὰ θελήματος θεοῦ
パウロ，召された使徒，神の意志によるキリスト・イエスの

Ⅱコリント1：1
Παῦλος ἀπόστολος Χριστοῦ Ἰησοῦ διὰ θελήματος θεοῦ
パウロ，使徒，神の意志によるキリスト・イエスの

フィリピ1：1
Παῦλος καὶ Τιμόθεος δοῦλοι Χριστοῦ Ἰησοῦ
パウロとテモテ，キリスト・イエスの僕たち

フィレモン1
Παῦλος δέσμιος Χριστοῦ Ἰησοῦ καὶ Τιμόθεος
パウロ，キリスト・イエスの囚人，そしてテモテ

ローマ1：1
Παῦλος δοῦλος Χριστοῦ Ἰησοῦ κλητὸς ἀπόστολος ἀφωρισμένος εἰς εὐαγγέλιον θεοῦ
パウロ，キリスト・イエスの僕，召された使徒，神の福音へと選び別たれた〔者〕

各テクストの文体的な特徴を概観しておくと，現存する最古のパウロ書簡であるⅠテサロニケ書には，共同発信人の名は記されてはいるが，発信人に肩書きは付されていない。ガラテヤ書には，発信人の名につづけて「使徒」の肩書きが記され，その肩書きを修飾する二重否定と二重肯定の構文（οὐκ～οὐδὲ～ἀλλὰ～καὶ～）がつづいている。Ⅰコリント書とⅡコリント書には，形容詞「召された」(κλητός)の有無の差こそあれ，「使徒」を属格 Χριστοῦ Ἰησοῦ（キリスト・イエスの）で受け，さらにその使徒職が「神の意志による」(διὰ θελήματος θεοῦ) ものであるとの説明は共通している。

また，フィリピ書とフィレモン書には，「僕たち」(δοῦλοι) ないし「囚人」(δέσμιος) との肩書きが付され[4]，それを属格 Χριστοῦ Ἰησοῦ で受ける文体はコリントの二書簡と共通する。ローマ書には，「僕」と「使徒」というふたつの代表的な肩書きが記され，前者の「僕」(δοῦλος) を属格 Χριστοῦ Ἰησοῦ で受ける文体は上記の四書簡と共通するが，後者の「召された使徒」(κλητὸς ἀπόστολος) には，「神の福音へと選び別たれた〔者〕」(ἀφωρισμένος εἰς εὐαγγέλιον θεοῦ) という説明句が，ἀπόστολος と同格の分詞 ἀφωρισμένος（選び別たれた〔者〕）を介して置かれている。

2.1.3.「使徒」の修辞的強調

上記で確認したように，パウロ書簡において，発信人の肩書きに長い説明が付されているのは，Ⅰコリント書，Ⅱコリント書，ローマ書，およびガラテヤ書の四書簡である。そして，これら四書簡に共通するのが「使徒」の肩書きである。コリントの二書簡とガラテヤ書から，双方の教会にパウロの使徒職に疑義を呈する者たちがいたことが知られており（Ⅰコリント9章，15：1-11，Ⅱコリント11-12章，ガラテヤ1-2章参照），「使徒」の肩書きが記されているのは，自己の使徒職の真正性を弁明する必要があったためだと考えられる。

そして，コリントの二書簡では，ἀπόστολος を属

[4] フィレモン1において，パウロにのみ「キリスト・イエスの囚人」という変わった肩書きが付されているのは，パウロが実際に獄中で囚われの身にあったときに，この書簡が書かれたという事情が反映されていると考えられる。

格 Χριστοῦ Ἰησοῦ で受け，その使徒職の根拠として，διὰ θελήματος θεοῦ と文章をつづけるという無理のない構文となっているのに比して，ガラテヤ書では，ἀπόστολος につづけて，οὐκ～οὐδὲ～ἀλλὰ～καὶ～という二重否定と二重肯定の文面がつづいており，ガラテヤ書の構文では，発信人に付された ἀπόστολος の肩書きが際立っていることがうかがわれるのである。

また，ローマ書では，「僕」と「使徒」という肩書きがふたつ並び，後者には説明句も付されており，ガラテヤ書と同様，発信人の肩書が，そして特に「使徒」の肩書きが修辞的に強調されていることは疑いえない。だが，ローマ書の場合，「使徒」の強調については，ガラテヤ書――およびコリントの二書簡――とは異なる事情が想定される。つまり，青野太潮が説明するように，「まだ見ぬ，そして自分自身が設立したのではないローマ教会に対して，そこへの訪問を視野に入れつつ，自らの神学思想を自己紹介的に書くということが，この手紙の執筆意図であった」[5]のであり，ローマ書における使徒職の真正性の強調もまた，自己紹介を目的としてなされたものだと考えられるからである。

したがって，ローマ書における「使徒」の修辞的強調は，ローマの教会に対して自己を積極的に紹介するためになされたものだということが理解できるのだが，そのような特別な執筆事情を持つローマ書と比べても，ガラテヤ書の「使徒」につづく構文が異彩を放っていることは一目瞭然だと言えよう。

このような比較からも明らかなように，ガラテヤ書の発信人の記述は他のパウロ書簡とは一線を画すものであり，ある種の異彩すら放っているということが看取されるのである。つまり，冒頭の Παῦλος ἀπόστολος という二語には，パウロが「使徒」であるということが際立って示されているということであり[6]，そのことからパウロが自らの使徒職を修辞的に強調しているということが読み取られるのである[7]。

2.2. 使徒職に関する修辞的機能

2.2.1. 二重否定の修辞的機能

そして，その修辞的強調をより効果的にしているのが，「使徒」の語の直後に居並ぶ二重否定と二重肯定の構文である。ガラテヤ書においてパウロが異様なまでに自らの使徒職にこだわっているということは，パウロが書簡の発信人である自らの名に「使徒」の肩書きを付すガラテヤ書以外の三書簡（ローマ１：1，Ⅰコリント１：1，Ⅱコリント１：1）のテクストとガラテヤ１：１のテクストとを比較すれば，一目瞭然である。

先にあげたテクストを見れば明らかなように，ローマ１：1，Ⅰコリント１：1，Ⅱコリント１：１には，ガラテヤ１：１のように自らの使徒職の人的関与を否定する発言はなく，あくまで自らの使徒職が「神の意志による」ものであるという肯定面のみがあげられている。それに対して，ガラテヤ１：１では，まずその使徒職の人的関与を「人々からではなく，人によってでもなく」（οὐκ ἀπ' ἀνθρώπων οὐδὲ δι' ἀνθρώπου）と記すことによって，二重に否定し，その後に彼の使徒職の神的根拠を「イエス・キリストと彼を死人たちのなかから甦らせた父なる神による」と記すことによって，二重に肯定するという手の込んだものになっている。すなわち，ガラテヤ書に特有の使徒職の「非根拠」（人的関与の否定）と「根拠」（神的根拠の肯定）とを並べ立てる記述は，他の三書簡とはまったく異なっているということであり，ある種の異様さすら漂っているのである[8]。

そして，このような使徒職に関する手の込んだ言説は，「パウロ，使徒」という修辞的強調をより効果的なものにしており，したがってガラテヤ１：１は単なる書簡の発信人の名をあげているものなどではなく，二重否定によって自らの使徒職の真正性を逆説的に強調するために，自らの使徒職の人的関与を全否定するという修辞的戦略に基づくものだと考えられるのである。

---

5) 青野太潮『パウロ書簡』（新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書Ⅳ』）岩波書店，1996 年，244-245 頁。

6) Franz Schnider/Werner Stenger, *Studien zum Neutestamentlichen Briefformular*, NTTS XI, Leiden/NewYork/København/Köln: Brill, 1987, 10 参照。

7) ガラテヤ１：１を日本語に訳すうえでは，冒頭の Παῦλος ἀπόστολος という二語は，「使徒パウロ」と順序を入れ替えて訳文の最後に持ってくるのが通例である（口語訳，新共同訳，青野『パウロ書簡』169 頁参照）。だが，「パウロ，使徒」という書簡劈頭の二語よって，パウロが自らの使徒職の真正性を強調していることを明示するために，私訳ではあえて「パウロ，使徒」と訳すことにした（田川建三『新約聖書　訳と註３――パウロ書簡　その一』作品社，2007 年，７頁の訳文を参照）。なお，ガラテヤ１：１の構文の場合には，西洋語ではギリシャ語と同じ語順を保てるので，英語訳《Paul, an apostle .....》（*KJV*, *RSV*, *NRSV*），ドイツ語訳《Paulus, ein Apostel .....》（ルター訳，チューリヒ聖書），フランス語訳《Paul, apoôtre .....》（エルサレム聖書，*TOB*）からも，パウロが自己の使徒職を修辞的に強調しているということが読み取られる。

8) Roy E. Ciampa, *The Presence and Function of Scripture in Galatians 1 and 2*, WUNT II/102, Tübingen: Mohr Siebeck, 1998, 38-40, 44-46 は，肯定面ではなく否定面が強調されていることを指摘する。

2.3．二重肯定の修辞的機能

パウロは自らの使徒職の二重否定の直後に,「イエス・キリストと彼を死人たちのなかから甦らせた父なる神による」（*ἀλλὰ διὰ Ἰησοῦ Χριστοῦ καὶ θεοῦ πατρὸς τοῦ ἐγείραντος αὐτὸν ἐκ νεκρῶν*）と文章をつづけている[9]。日本語に訳す場合には明示されないが，引用したギリシャ語の冒頭に，接続詞 *ἀλλά*（しかし）が入っていることからも解せられるように，パウロは *ἀλλά* 以下を自らの使徒職の根拠として示している。Ⅰコリント１：１とⅡコリント１：１では,「神の意志による」（*διὰ θελήματος θεοῦ*）という肯定面のみをあげて，自らの使徒職の真正性が述べられているのに対して，ガラテヤ１：１の二重肯定は二重否定の後に置かれており，双方のテクストにおける使徒職の神的根拠を示す文面には，大きな隔たりがある。

すなわち，Ⅰコリント１：１とⅡコリント１：１における使徒職の神的根拠の呈示は，自らの使徒職の真正性を表明するためのものであるのに対して，ガラテヤ１：１における神的根拠の呈示は,自らの使徒職の人的関与を二重否定（全否定）していることを正当化するために持ち出されたものだと言えるのである[10]。したがって，ガラテヤ１：１における使徒職の神的根拠の呈示は，あくまで自らの使徒職の人的関与を否定するための修辞的効果を狙うことがその主要な目的だったと考えられるのである。

2.4．伝承の利用
── 修辞的証明手段としての伝承

ガラテヤ１：１における使徒職の二重肯定には,「彼を死人たちのなかから甦らせた父なる神」（*θεοῦ πατρὸς τοῦ ἐγείραντος αὐτὸν ἐκ νεκρῶν*）という表現が用いられている。この一文は原始キリスト教の最古の伝承に溯源するものである[11]。パウロの修辞的戦略が「人々」と「人」という二重否定と対置させることだけが目的であれば,「イエス・キリスト」と「神」という二重肯定を並置さえすればいいはずなのだが，パウロはあえてここに伝承を導入している。では，なぜパウロはこのような形で伝承を利用したのであろうか。

その理由として最も蓋然性が高いのは，「伝承」が有する特別な修辞的機能を明らかにした修辞学上の理論に基づく解釈であり，伝承が修辞的証明手段としての機能を持っているとの主張である[12]。ガラテヤ１：１において，パウロが利用する伝承は，「神がイエスを甦らせた」ことをその内容としている。これは原始キリスト教の最古の伝承であると同時に，原始キリスト教が依拠する最重要の信仰告白でもある。それゆえ，この伝承の内容はこの時代のキリスト教において絶対的な価値を持っていたと考えられ，この伝承を共有する者たちのあいだでは，その真理契機に異議が唱えられることがないゆえに，この伝承を議論や説得のさいに用いることは，極めて有効な修辞的手法だったと考えられるのである[13]。

そして，ガラテヤ１：１において，パウロは自らの使徒職の真正性を証明する手段として，伝承を持ち出し，伝承を利用することによって，自らの使徒職に対する疑義を払い除けようとしたのである。したがって,ガラテヤ１：１のテクストにおける伝承の付加は，伝承を媒介とすることによって，パウロが自

---

[9] ヒエロニムスによるマルキオンの引用では,「父なる神」（*καὶ θεοῦ πατρός*）の語が削除されている（ネストレ版ギリシャ語新約聖書［Nestle/Aland (ed.), *Novum Testamentum Graece*, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, [28]2012］のアパラトゥス参照）。その場合には，*τοῦ ἐγείραντος αὐτὸν ἐκ νεκρῶν* の *αὐτόν*（彼を）は *αὑτόν*（彼自身を）と読み替えられ，イエスが「自分自身を死から甦らせた」との読みが採られる。しかし，これがマルキオンによる削除だということに異論を挟む余地はない。詳しくは，Adolf von Harnack, *Marcion. Das Evangelium vom fremden Gott*, BKT, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1996［Leipzig: Hinrichs, [2]1924］, 67*f. が行っているマルキオンのテクストの再構成と解説を参照。

[10] ダニエル・パット『構造主義的聖書釈義とは何か』（聖書学の基礎知識）山内一郎／神田健次訳，ヨルダン社，1984年，136-138頁，idem, *Paul's Faith and the Power of the Gospel: A Structural Introduction to the Pauline Letters*, Philadelphia : Fortress Press, 1983 40-42参照。

[11] 佐竹明『ガラテア人への手紙』（現代新約注解全書）新教出版社，[2]2008年，29頁，Hans D. Betz, *Galatians: A Commentary on Paul's Letter to the Churches in Galatia*, Hermeneia, Philadelphia: Fortress, 1979, 39; Udo Borse, *Der Brief an die Galater*, RNT, Regensburg: Pustet, 1984, 44; James L. Martyn, *Galatians: A New Translation with Introduction and Commentary*, AB 33A, New York/London/Toronto/Sydney/Auckland: Doubleday, 1997, 84f.；山内眞『ガラテア人への手紙』日本基督教団出版局，2002年，47，402-403頁注24，原口尚彰『ガラテヤ人への手紙』（現代新約注解全書　別巻）新教出版社，2004年，46頁。ただし，「父」の句は荘厳さを演出するためのパウロによる付加だと考えられる。なお，拙論「ガラテヤ書１章1-5節の文学的・心理学的分析 ── ガラテヤ書前書きにおけるパウロの修辞的戦略と心理的葛藤」『神学研究』58号，関西学院大学神学研究会，2011年，50頁参照。

[12] Anders Eriksson, *Tradition as Rhetorical Proof: Pauline Argumentation in 1 Corinthians*, CBNTS 29, Stockholm: Almqvist & Wiksell, 1998参照。

[13] D. Francois Tolmie, *Persuading the Galatians: A Text-Centered Rhetorical Analysis of Pauline Letter*, WUNT II/190, Tübingen: Mohr Siebeck, 2005, 35-37参照。

らの使徒職の真正性をガラテヤの諸教会に対する証明の手段として用いる修辞的戦略に基づくものだと考えられるのである[14]。なぜなら，この伝承はパウロとガラテヤの諸教会の双方が信じ，共有していたものであったゆえに，その伝承を引き合いに出すことが，自らの使徒職の真正性を証明する最も有効な修辞的効果を持っていたからにほかならない[15]。

3．初期キリスト教における使徒の概念

3.1．使徒の条件
── ルカ文書とパウロ書簡における使徒

3.1.1．ルカ文書における使徒の条件
── 十二弟子と復活の証人

上述した議論において，パウロが自らの使徒職を修辞的にことさらに強調しているということが明らかになった。しかし，自らの使徒職を異様なまでに強調するパウロの物言いから逆説的に知られることは，その弁証的かつ論争的性格からしても，「パウロ＝使徒」との定式が成立していなかったということが反対に証明されてしまうということである。

キリスト教世界では，「パウロ＝使徒」という定式は自明なこととして信じて疑われていないのだが，初期キリスト教においてはどうも事情が違うようである。いわゆる十二使徒（十二弟子）にパウロを加えた十三人が使徒として定着するようになったのは，２世紀に入ってからだと言われている[16]。実際，その後半がパウロ行伝とも言える使徒行伝（使徒言行録）において，── 後述する例外を除くと ── ルカは注意深くパウロを使徒と呼ぶことを避けている。なぜなら，ルカ６：12-16 からも明らかなように，ルカにとって，使徒とはイエスの直弟子である「十二人」（δώδεκα）に限定されており，「十二弟子」という神学的理念によって完結した概念だったからである[17]。

だが同時に，ルカにはもうひとつ別の使徒の基準も看取される。それはイスカリオテのユダの補充としてマティアが十二使徒に組み入れられるさいに導入されている基準，すなわちイエスの復活の目撃者だということである（使徒１：21-26）[18]。もっとも，厳密に言えば，ルカはあくまで自らが掲げる十二使徒の理念を完全なものとしておくために，欠員を補充するという物語を創作しており，そのために復活の目撃者という別の基準を持ち出してきたのだと考えられる。

3.1.2．パウロ書簡における使徒の条件
── 復活の目撃者

だが，ルカがここで持ち出してきた別のもうひとつの基準は，何もルカに独創的なものではない。なぜなら，パウロが自分自身を使徒だと証示する根拠が，ほかならぬ復活の目撃者だということだからである[19]。Ⅰコリント書において，パウロは自らの使徒職に疑義を挟む者たちに対して，「わたしは自由人ではないのか。わたしは使徒ではないのか。わたしはわたしたちの主イエスを見なかった〔とでも言う〕のか」（Ⅰコリント９：1）と述べており，ここからパウロが自己の使徒職の真正性の根拠を復活の目撃者であることに置いているということが理解できる（9：2 をも参照）。

また，彼は復活の目撃者を列挙するⅠコリント 15：1-11 の文脈において，パウロ以前の復活の目撃者を列挙する 3b-7 節の伝承の後に，自らの名を付加し（８節），自らのダマスコでの召命体験（幻視体験）を彼以前の復活の目撃体験（幻視体験）と並置し，自らの使徒職の真正性の証左にしていることが看取される（15：9-11 をも参照）。

さらに，Ⅱコリント４：6，ガラテヤ１：11-12，15-16 において，パウロはダマスコでの召命体験（幻視体験）に言及しており，彼がこの召命体験に自らの使徒職の根拠を見出していることは明らかであ

---

14) 拙論「ガラテヤ書１章 1-5 節の文学的・心理学的分析」46-47，51 頁参照。より詳しくは，Tolmie, *Persuading the Galatians*, 31-37 を参照。

15) Tolmie, *Persuading the Galatians*, 35-37 参照。なお，同様の伝承の利用はガラテヤ１：４にも確認することができるのだが，そこでもまた修辞的証明手段として伝承を持ち出すことによって，書簡の挨拶の定式に綻びが生じている（拙論「ガラテヤ書１章 1-5 節の文学的・心理学的分析」46-47，51 頁参照）。

16) 荒井献『使徒行伝　上巻』現代新約注解全書，新教出版社，1977 年，3-4，6 頁。だが同時に，１世紀末から２世紀初頭に位置づけられるディダケー11：3-6 では（日本語訳は，佐竹明訳「十二使徒の教訓」，荒井献編『使徒教父文書 ──《聖書の世界》別巻４・新約Ⅱ』講談社，1974 年，25 頁＝荒井献編『使徒教父文書』講談社文芸文庫，講談社，1998 年，36 頁），使徒の概念が十二使徒 ── およびパウロ ── に限定されない，より広い概念として用いられていることが窺われる（Kurt Niederwimmer, *Die Didache*, KAV 1 (Ergänzungsreihe zum KEK 1), Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, ²1993, 215 参照）。

17) Ernst Haenchen, *Die Apostelgeschichte*, KEK III, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, ¹⁵1968, 102.

18) 荒井『使徒行伝　上巻』４頁，Charles K. Barrett, *A Critical and Exegetical Commentary on the Acts of the Apostles*, Vol. I, ICC, Edinburgh: T. & T. Clark, 1994, 666f. ほか参照。

19) 関連する聖書テクストについは，Harald Riesenfeld, Art. Apostel, *RGG*³ I (1957), 498f.; Ferdinand Hahn, Art. Apostel, *RGG*⁴ I (1998), 637f. を参照。

る[20]。したがって，パウロにとっての使徒の基準とは，復活の目撃者であるという一事に尽きると言えるのである[21]。

3.2．使徒概念の綻びと揺らぎ

3.2.1．使徒 14：4，14
── ルカ文書における使徒概念の綻び

上述したように，ルカは使徒を十二弟子に限定しており，── ここで論じる例外を除くと ── パウロでさえも使徒と呼ばれることはないのだが，ルカは使徒 14：4，14 の二箇所において，パウロとバルナバを「使徒たち」（*ἀπόστολοι*）と呼んでおり，その使徒概念を複雑にしてしまっている。その解決の試みとしていくつかの仮説が立てられている。

そのひとつは，ルカにおいて「使徒」という語は十二使徒に限定されてはいるのだが，使徒 14：4，14 はⅡコリント 8：23，フィリピ 2：25 と同様に，「教会からの使者（使徒）」（使徒 13：3，14：26 参照）というより広い意味合い ──「宣教者」ほどの意味 ── でルカ自身が用いているとの解釈である[22]。だが，この解釈は不評であり，その批判も含めて，使徒 14：4，14 の「使徒」をルカ以前の教会の伝承における広義の使徒概念の痕跡と見なし[23]，さらにその原因をルカがここで用いている ── アンティオキアの教会の ── 伝承資料における「使徒」の記述をそのまま残したことに帰する説が有力視されている[24]。さらに興味深い仮説として，ルカは「うっかり口が滑って」パウロとバルナバとを「使徒」と呼んでしまったと想定する見解がある[25]。

もっとも，歴史批評を謳う聖書学では，上述したように，資料問題に原因を帰する説を採用するのが趨勢となっているのだが，仮に資料問題に原因を帰するにしても，ルカが使徒行伝（使徒言行録）において「使徒」という語を広義の使徒概念で用いてしまっているという「事実」に変わりはない。ルカは伝承における広義の使徒概念もパウロが使徒と呼ばれていたことをも知っていただろうから[26]，細心の

---

[20] 拙論「ガラテヤ書 1 章 1-5 節の文学的・心理学的分析」54-55 頁参照。

[21] Ⅰコリント 15：3b-7 のイエスの弟子たちの目撃体験（幻視体験）とパウロのダマスコでの召命体験（幻視体験）とはまったく別のものであり，それこそがパウロが自らの使徒職の神的な根拠にこだわらざるをえなかった原因だったと考えられる。この問題については，拙論「ガラテヤ書 1 章 1-5 節の文学的・心理学的分析」45-56 頁を参照。

[22] Karl H. Rengstorf, Art. *ἀπόστολος*, *ThWNT* II (1933), 422；グスタフ・シュテーリン『使徒行伝』大友陽子／秀村欣二／渡辺洋太郎訳，NTD 新約聖書註解 5，NTD 新約聖書註解刊行会，1977 年，1-2, 54-56, 378-379 頁 ── ただしシュテーリンはルカが伝承資料を用いていた可能性を否定してはいない（378-379 頁）──，Klaus Berger, *Theologiegeschichte des Urchristentums. Theologie des Neuen Testaments*, Tübingen/Basel: Francke Verlag, 1994, 182.

[23] ハンス・コンツェルマン『時の中心 ── ルカ神学の研究』田川建三訳，新教出版社，1965 年，361-363 頁注 1（コンツェルマンに関しては下注 24 をも参照），Thorwald Lorenzen, *Resurrection and Discipleship: Interpretive Models, Biblical Reflections, Theological Consequences*, Maryknoll, N.Y.: Orbis Books, 1995, 308f. なお，Karl H. Kertelge, Art. Apostel (Apostelamt) I. Biblisch, *LThK* Ⅰ (1957), 734-736 をも参照。

[24] Hans Conzelmann, *Die Apostelgeschichte*, HNT 7, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, ²1972, 79, 81; Haenchen, *Apostelgeschichte*, 362 Anm. 5；荒井『使徒行伝　上巻』5 頁，同「使徒行伝」，佐藤研／荒井献『ルカ文書 ── ルカによる福音書　使徒行伝』（新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書Ⅱ』）岩波書店，1995 年，214-215 頁注 3＝同「使徒行伝」『荒井献著作集　別巻 ──（訳注）使徒行伝　ナグ・ハマディ文書』岩波書店，2002 年，69 頁注 3，Jürgen Roloff, Art. Apostel, *TRE* III (1978), 435, 443; Hans D. Betz, Art. Apostle, *ABD* I (1992), 310; Joseph A. Fitzmyer, *The Acts of the Apostles: A New Translation with Introduction and Commentary*, AB 31, New York/London/Toronto/Sydney/Auckland, Doubleday, 1998, 526. また，Lothar Wehr, *Petrus und Paulus. Kontrahenten und Partner: Die beiden Apostel im Spiegel des Neuen Testaments, der Apostolichen Väter und früher Zeugnisse ihrer Verehrung*, NTAbh Neue Folge 30, Münster: Aschendorff, 1996, 2f., 137 Anm. 55 をも参照。

なお，Haenchen, *Apostelgeschichte*, 102 Anm. 1 は，使徒 14：4，14 においてパウロとバルナバとがアンティオキアから派遣された「使徒」と呼ばれていることによって，ルカにとっての十二使徒の概念が変わるわけではないと言う（上述のように，ヘンヘンは「資料説」を採っているので，このように言えるものと思われる）。ヘンヘンに反対する意見としては，Stanley E. Porter, *The Paul of Acts: Essays in Literary Criticism, Rhetoric, and Theology*, WUNT 115, Tübingen: Mohr Siebeck, 1999, 196f. は，パウロの使徒性を擁護するために，使徒行伝（使徒言行録）もパウロを使徒と呼んでいるではないか，と懸命に弁護するに留まっており，説得的とは言えない。また，Ludger Schenke, *Die Urgemeinde. Geschichtliche und theologische Entwicklung*, Stuttgart/Berlin/Köln: Kohlhammer, 1990, 80 は，バルナバの使徒性のみを躍起になって否定しているが，これもまたパウロの使徒職を弁護するためだけになされた議論であり，とても支持できるものではない。

[25] チャールズ・K・バレット『新約聖書の使徒たち』中村民男訳，日本基督教団出版局，1986 年，99 頁。しかし，バレットはその使徒行伝（使徒言行録）注解において（idem, *Acts* I, 666f., 671f., 678f.），ルカが単純な不注意によって使徒という語を使っているとの説を最もありそうにないと述べ（671），さらに「ルカは相反する意見と用法を並置しているわけでは絶対にない」（672）とし，現在はルカが意図的に広義の使徒概念を用いてパウロを使徒と呼んでいるとの見解に鞍替えしたようである（667，672 参照）── ただし『新約聖書の使徒たち』の原書は手に入らなかったので見ていない。

[26] 佐竹明『使徒パウロ ── 伝道にかけた生涯』NHK ブック

注意を払いつつも，「うっかり口が滑って」パウロとバルナバとを「使徒」と呼んでしまったと考えることも許されるのではなかろうか[27]。

むろん，ルカの矛盾を資料問題に帰し，矛盾を解消するのもひとつの解釈だが，矛盾を矛盾としてそのまま受け入れ，ここにルカ思想のちょっとした「綻び」を読み取ることでわたしとしては満足したい。したがって，ルカにとっての使徒とは，十二使徒という神学的理念によって完結した狭義の使徒概念ではあるのだが，使徒 14：4，14 における綻びから知られるように，ルカ自身もパウロおよびバルナバをも含む広義の使徒概念が存在していたということを知っていたのは確かだと言いうるのである[28]。

3.3.2．パウロ書簡における使徒概念の揺らぎ

上述したように，パウロは復活の目撃者を使徒の基準としているのだが，パウロが使徒という語をより広義に用いているテクストも確認できる。すなわち，パウロは，アンドロニコスとユニア（ローマ 16：7）[29]，テトス（IIコリント 8：23），エパフロデト（フィリピ 2：25）を使徒と呼んでいるが[30]，これらの者たちが復活の目撃者であるとは考えられない。

また，Ｉコリント 4：9，9：5，15：7 では，そもそも使徒に限定など加えられてはおらず，Ｉコリント 15：3b-7 の最古の復活顕現伝承では，「ケファ」と「十二人」（十二弟子）と「すべての使徒たち」とがまったく別に扱われており[31]，使徒が広義の意味で用いられていることが確認できるのである[32]。

そして，Ｉコリント 12：28 では，教会の一種の職務としての使徒職への言及がすでに確認される。このテクストにおけるパウロの使徒職への言及には，パウロ自身がその使徒職の根拠として引き合いに出す復活の目撃者という基準を当てはめることすら不可能である。したがって，パウロの使徒概念もまた「揺らぎ」を内包しており，パウロ書簡に一貫した使徒概念を読み取ることは諦めねばならない。

3.3．初期キリスト教における使徒の概念

上記で論じたように，ルカ文書とパウロ書簡においては，使徒が十二使徒に限定されるか否かという点での違いはあるが，復活の証人という点において両者は一致しており，パウロとルカとで共通する復活の証人ということが，初期キリスト教における使徒の基準であったと想定することがいちおうは可能

ス 404，日本放送出版協会，1981 年，35 頁＝同『使徒パウロ ── 伝道にかけた生涯 新版』新教出版社，2008 年，40 頁参照。また同時に，Barrett, *Acts* I, 667 は，ルカがパウロを使徒と呼ぶことがほとんどない理由を，Ｉコリント 9：2 から類推し，パウロが使徒と認められていなかったことをルカが知っていたためではないかと想定している。

27) 確かに，同一のコンテクストに含まれる使徒 14：4 と 14 のみで，パウロとバルナバとを「使徒たち」と呼んでいるのだから，歴史批評学的に言えば資料説にはそれなりの蓋然性がある。そこで資料説を受け入れるとすれば，ルカは「パウロ＝使徒」という概念をすでに知っていたために，伝承資料における「使徒」の語が自己の使徒概念と矛盾していることを「ついうっかりして」気づかなかったゆえに，そのままにしてしまったとでも考えられようか。いずれにせよ，パソコンを使ってコピー＆ペーストで資料を取り込むわけではないのだから，ルカ自身がパウロとバルナバとを「使徒」と「呼んで／書いて」しまっているという「事実」に変わりはない。

28) ルカは広義の使徒概念の存在を知っていたからこそ，戦略的に使徒概念を「十二使徒」に限定して神学的に「昇華」させ，狭義の「使徒」によって広義の「使徒」を止揚しているのではないだろうか。

29) ローマ 16：7 の *Ἰουνιαν* は，アクセントの位置によって，女性名ユニア（*Ἰουνίαν*［主格 *Ἰουνία*］）とも，男性名ユニアス（*Ἰουνιᾶν*［主格 *Ἰουνιᾶς*］）とも読むことが可能である。従来はユニアスと解されてきたが，ユニアという女性名に解したい。なお，ユニアの読みを採るのは，青野『パウロ書簡』69 頁注 9，荒井献『初期キリスト教の霊性』岩波書店，2009 年，77-93 頁であり，田川建三『新約聖書　訳と註 4 ── パウロ書簡その二／擬似パウロ書簡』作品社，2009 年，349-350 頁は，「ユニアス」の表記を採用している。なお，拙論「異性愛主義と聖書解釈 ── フィレモン書 1b-2 節におけるフィレモン，アプフィア，アルキッポスの関係性」『新約学研究』39 号，日本新約学会，2011 年，93 頁注 56 参照。

30) 上述したように，ローマ 16：7，IIコリント 8：23，フィリピ 2：25，使徒 14：4，14 における「使徒」は，教会派遣の「使徒／使者」と見なされており，「教会使徒」（Gemeindeapostel）と呼ばれ，エルサレムの使徒（十二使徒）と一線を画されている。上記の者たちを使徒職から排除する考えにわたしは賛成できない。後述するＩコリント 15：3b-7 の最古の復活顕現伝承から知られるように，初期の使徒とは十二使徒やパウロに限定されてなどいないのである。使徒職に限定を加えるならば，使徒 14：4，14 におけるバルナバの使徒職とともにパウロの使徒職をも否定すべきである。パウロの使徒職だけを擁護して，パウロが使徒と呼んでいる者たちを使徒職から排除する道理はない。また，使徒 8：14 において「エルサレムにいる使徒たち」がペトロとヨハネとを「遣わした（*ἀπέστειλαν*）」（*ἀπόστολος* の動詞形）という記述があることを考えると，エルサレムの使徒であるペトロとヨハネもまたエルサレムの「教会使徒」にしか過ぎないと言うべきではなかろうか。Berger, *Theologiegeschichte*, 182 は，IIコリント 8：23 やローマ 16：7 における「使徒」を「教会使徒」と呼んではいるが，劣った地位の使徒ではないと指摘している。エルサレムの使徒は「正統な使徒」，パウロは超法規的に「正統な使徒」，それ以外は使徒ではなく「教会派遣の使者」でしかないと決めつけ ── ほかならぬパウロ自身が「使徒」（*ἀπόστολος*）と呼んでいるにもかかわらず ──，現在の価値観から使徒に序列をつける必要があると言うのだろうか。

31) ハンス・コンツェルマン『新約聖書神学概説』田川建三／小河陽訳，新教出版社，1974 年，55-56，364-365 頁参照。

32) しかし同時に，Ｉコリント 15：7 の「すべての使徒たち」は復活の目撃者でもある。

である[33]。だが，双方の文書において，使徒概念の綻びないし揺らぎが確認できることから，初期キリスト教において，使徒とは一様な概念で括ることのできるものではないということもまた確かである。

このように使徒の概念や条件が定まっていないということを前提とすれば，パウロが自らの判断で自分や他の宣教者を使徒として理解していたということは，あながちおかしなことではなく，したがって以下で論じるガラテヤ１：１の釈義的考察においては，初期キリスト教における使徒の概念が一様ではなかったということを前理解にすることが肝要だと言えるであろう。

４．パウロの使徒職の真正性 ── ガラテヤ１：１の釈義的考察

4.1．諸説の検討

では，次にガラテヤ１：１の釈義的考察を通して，パウロがその使徒職の真正性をこれほどまでに強調するに至った歴史的状況を明らかにすることを試みる。

ガラテヤ１：１の「人々からではなく」（*οὐκ ἀπ' ἀνθρώπων*）と「人によってではなく」（*οὐδὲ δι' ἀνθρώπου*）という二重否定の文面には，前置詞 *ἀπό* と *διά* の差異および複数の「人々」（*ἄνθρωποι*）と単数の「人」（*ἄνθρωπος*）という差異が認められる。双方の文章を厳密に区別することには否定的な見解もあるが[34]，両者は明確に区別して理解する必要がある[35]。

双方を厳密に区別する注解者の多くは，*ἀπό* が使徒職の「起源」に，*διά* が使徒職の「任命」に関わると解釈している[36]。私見でも，後者の *διά* を「任命」と解する点において，先の注解者たちに従うが[37]，前者の *ἀπό* は「派遣」の意に解したい。なぜなら，ウド・ボルゼが説明するように，前置詞 *ἀπό* は *ἀπόστολος* の接頭辞 *ἀπό* と密接に関わっていると考えられるからである[38]。そして，「人々からではなく」の「人々」とは，*ἀπό* が「派遣」と関係するとの考えに基づけば，「使徒」を派遣する「人々」，すなわち使徒職の背後に想定される「教会」を指すと考えられるであろう。

また，フランツ・ムスナーは，*ἀπ' ἀνθρώπων* を「任命」と解し，その背後にエルサレム教会ないしアンティオキア教会を想定し，*δι' ἀνθρώπου* の背後にペトロ（エルサレム教会の代表者）ないしバルナバ（アンティオキア教会の代表者）── およびアナニア（使徒９：10-19，22：12-16 参照）をも示唆 ── という権威がより強く隠れているとする見解を表明している[39]。ムスナーは *ἀπό* を「任命」の意に解しており，ボルゼ説に従い，*ἀπό* を「派遣」の意に採る私見との相違点はあるものの，「人々」の背後に「権威的教会」を，「人」の背後に「権威的代表者」を想定することには賛成である[40]。

さらに，ジェームズ・L・マーティンは，「人々」を「アンティオキアの教会」，「人」を「エルサレム教会の指導者のひとり（ヤコブないしペトロ）」と解し，パウロがアンティオキア教会およびエルサレム教会の指導者によって遣わされたのではない，と宣言していると説明する[41]。パウロが自らの使徒職に対する人的関与を全否定していることを考えると，

---

33) すでに述べたように，使徒を十二弟子に限定するのは，本来はルカの神学的理念でしかない。そのことは，パウロが使徒を十二使徒に限定せずに用いていること，ならびにルカ６：12-16 の並行記事であるマルコ３：13-19 とマタイ 10：1-4 には，十二弟子を使徒と同定するような記述が見当たらないこと，この二点からも明らかである。

34) Heinrich Schlier, *Der Brief an die Galater*, KEK 7, Göttingen [13]1965, 27f.; Albrecht Oepke, *Der Brief des Paulus an die Galater*, Bearbeitet von Joachim Rohde, ThHNT IX, Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, [5]1984, 44；山谷省吾『パウロ書簡・新訳と解釈 ── ガラテヤ人への手紙・テサロニケ人への手紙』新教出版社，1972 年，22 頁，佐竹『ガラテア人への手紙』21-22 頁，堀田雄康「ガラテヤの信徒への手紙」『新共同訳　新約聖書注解Ⅱ』日本基督教団出版局，1991 年，158 頁，山内『ガラテア人への手紙』44 頁。

35) Burton, *Galatians*, 3f.; Donald Guthrie, *Galatians*, NCB, London: Marshall, Morgan & Scott, 1973, 57; Mussner, *Galaterbrief*, 45; Borse, *Galater*, 44; Richard N. Longenecker, *Galatians*, WBC 41, Dallas: Word, 1990, 4.

36) Burton, *Galatians*, 3; Guthrie, *Galatians*, 57; Longenecker, *Galatians*, 4；原口『ガラテヤ人への手紙』45-46 頁。

37) 田川『新約聖書　訳と註３』142 頁は，前者を「媒介」，後者を「任命」の意に理解する。

38) Borse, *Galater*, 44.

39) Mussner, *Galaterbrief*, 45.

40) Mussner, *Galaterbrief*, 45 Anm. 11 参照。ここで用いられている二重否定の構文が *οὔτε～οὔτε～*という同等の否定ではなく，*οὐκ～οὐδέ～*という前者から後者へと高揚していく類の二重否定であるとの論拠から，ムスナーは *ἀπ' ἀνθρώπων* よりも *δι' ἀνθρώπου* の方により強く「単一の権威」（eine einzelne Autorität）が隠されていると推論するもの思われる。なお，*οὐκ～οὐδέ～*の文法的な問題については，Friedrich Blass/Albert Debrunner, *Grammatik des neutestamentlichen Griechisch*, Bearbeitet von Friedrich Rehkopf, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, [18]2001, § 445; Walter Bauer, *Griechisch-deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der frühchristlichen Literatur*, Hrsg. von Kurt Aland und Barbara Aland, Berlin/New York: de Gruyter, [6]1988, 1196f.を参照。

41) Martyn, *Galatians*, 83f.

ἀπ’ ἀνθρώπων をアンティオキアの教会，δι’ ἀνθρώπου をエルサレム教会の指導者（ペトロ／ヤコブ）と解する見解も説得力を持つと言える。

4.2．人的関与の二重否定
── パウロの使徒職の非根拠

これらの諸説を参考にしつつ，私見をまとめると，まず前置詞については，ἀπό は「派遣」を意味し，διά は「任命」を意味すると理解できる。

そして，複数の「人々」は「教会」を指すと考えられるが，ここではエルサレム教会とアンティオキア教会の双方が含意されていると理解したい。すなわち，パウロは自らが何らかの地上の教会から派遣された使徒ではなく，いかなる教会にも従属する類の使徒ではないと宣言しているということである。もっとも，パウロを使徒として直接派遣していたのは「アンティオキア教会」だと考えられ，それゆえ「アンティオキア教会」が第一候補として考えられるかもしれないのだが，ガラテヤ書の全体の空気が反エルレサム教会で満ちているということを勘案すると「人々からではなく」という否定には，「権威的教会」であるエルサレム教会も含まれていると考える方が自然であろう。

また，単数の「人」は，この時代の教会の「権威的代表者」を指すと見なすことが許されるであろう。その場合，候補にあげられるのは，ガラテヤ書に名をあげられている「ヤコブとケファとヨハネ，すなわち柱だと思われている者たち」（ガラテヤ２：9）のいずれかに絞られる。これらの三者は最初期エルサレム教会の代表者であり，「要人だと思われている者たち」（ガラテヤ２：2，6），また「超使徒たち」（IIコリント 11：5，12：11）とパウロが呼ぶ者たちでもある。

上記でムスナーとマーティンが具体的に名をあげているように，候補は「ペトロ」か「ヤコブ」のいずれかであろう。ガラテヤ２：9 の名前の順序が示唆するように，この時代のエルサレム教会の実質的「権力者」はイエスの兄弟ヤコブであった。おそらく，ヤコブは血縁者に跡を継がせようとする「血縁信仰」とでも言うべき象徴的権力者の登場への期待を後ろ盾とし，イエスの兄弟であることに物を言わせてエルサレム教会の実権を掌握したと考えられるが，ここで問題となっているのは使徒職の任命者としての教会の代表者たる使徒のはずである。そう考えると，この「人」とは，十二弟子という後の十二使徒の理念の基盤となり，イエスの一番弟子として知られる使徒ペトロだと考えるのが至当である。

その典拠となるのは，先に言及したＩコリント 15：3b-7 の最古の復活顕現伝承である。そこでは，「ケファ」と「十二人」（十二弟子）と「すべての使徒たち」とがまったく別に扱われ，ケファ，すなわちペトロは復活の目撃者の筆頭に名をあげられており，初期キリスト教において，ペトロが他の追随を許さないほどに，教会の「権威的代表者」として位置づけられていたことは間違いないからである[42]。したがって，パウロは「人によってではなく」という否定によって，使徒ペトロという「権威的代表者」によって任命された使徒ではないと宣言しているということであり，この宣言によって，パウロは自らの使徒職には，いかなる人的関与も存在してはいないということを表明しているのである。

4.3．神的根拠の二重肯定
── パウロの使徒職の根拠

彼の使徒職を根拠づける二重肯定は，「イエス・キリスト」と「父なる神」のふたつからなるが，否定面ではそれぞれに異なる前置詞の ἀπό と διά とが使い分けられていたのに対して，肯定面では「イエス・キリスト」と「神」が前置詞 διά によってひとまとめにされている[43]。先に確認した δι’ ἀνθρώπου の用法から類推して，διά を「任命」の意に採るのが素直であろう[44]。つまり，イエス・キリストと神とによって直接「任命」を受けた使徒という意味に理解するということである。したがって，使徒職に関するイエス・キリストと神の役割を，ひとつの前置詞 διά で双方が結ばれているにもかかわらず，イエス・キリストを「任命」，神を「起源」に関わると見なすといったことで[45]，両者の役割を区別するのは適当ではない[46]。

パウロの使徒職が「任命」（前置詞 διά）によって

---

42) むろん，ペトロが初期キリスト教の「権威的代表者」であったということは，四福音書と使徒行伝（使徒言行録）から最も良く知られることである。

43) なお，二重肯定の文章において，ἀπό と διά とが使い分けられていないことが，二重否定の文章において，ἀπό と διά とのあいだに特別な意味上の相違はない，と見なす注解者たちのひとつの根拠になっている。

44) Mussner, *Galaterbrief*, 45 が同意見。

45) Duncan, *Galatians*, 8. また Guthrie, *Galatians*, 57f. は，イエス・キリストを「任命」に，神を「任命と起源」に関わるとする。

46) Burton, *Galatians*, 5f. は，双方が「任命」「起源」の両方に関わると理解する（Longenecker, *Galatians*, 4 がバートンに従っている ── ただしロンゲネッカーは ἀπό を「神の」の語の前に［　］括弧に入れて挿入する（1，4）──）。Oepke, *Galataer*, 44 は，イエス・キリストと神の双方を「派遣の主体」と見る。

括られている理由として考えられるのは，ガラテヤ1：15-17の記述から推測すると，パウロにとって啓示を受けた「召命」が，そのまま使徒職への「任命」でもあったというパウロの認識に起因するものであろう[47]。むろん，召命と使徒職への任命とが，同一時に起こった同一の出来事であるというパウロの認識は，かなり誇張されたものだと考えられるだが。

4.4．パウロの使徒職の真正性 ── その歴史的状況

先にも指摘したように，パウロがここまで自らの使徒職の人的関与を否定し，その神的根拠を修辞的に強調せざるをえなかったのは，パウロが使徒として認められていなかったことの証左でもある。Ⅰコリント15：3b-7の最古の復活顕現伝承において，「ケファ」「十二人」「五百人以上の兄弟たち」「ヤコブ」「すべての使徒たち」という復活顕現の目撃者のリストにおいて，ケファ（ペトロ）とヤコブのみが個人名をあげられているのだが，パウロはそこに自らの名を付加することで，ペトロとヤコブに対抗しているかのようである。

また，ガラテヤ書においても，召命後すぐに「わたし以前の使徒〔となった者〕たちのもとに行かなかった」(1：17)と述べ，つづく1：18-19でもケファとヤコブの個人名をあげつつも，他の使徒には誰とも会わなかったと述べることで，ここでもケファ(ペテロ）とヤコブを過剰に意識していることがうかがわれる。さらに，「使徒会議」(ガラテヤ2：1-10，使徒15章）において，「ヤコブとケファとヨハネ」と「わたし〔＝パウロ〕とバルナバ」とで一種の宣教協約を結んだにもかかわらず，「アンティオキアの衝突」(ガラテヤ2：11-21)において，パウロは約束を反故にされ，劣勢に立たされるという屈辱を味わっている。

このような複雑な思いを持っていたパウロの率直な感情が，上述した復活顕現伝承の直後に吐露されている。「わたしは使徒たちのなかの最も小さな者であり，使徒と呼ばれるに足る者ではない」(Ⅰコリント15：9)。これは決して遜った発言などではなく，これがパウロの置かれていた歴史的現実だったのである。そして，このような現実が自分の設立したガラテヤの諸教会にも及び，それまでパウロの教えや使徒職を当然のものとして受け入れていたはずだったにもかかわらず(ガラテヤ1：6a，5：7a)，ユダヤ主義的な宣教者の出現によって事態は一変した。なぜなら，ガラテヤの諸教会の者たちは「異なる福音」(ガラテヤ1：6)を受け入れ(1：6-9，5：7-11)，そのことによってパウロの使徒職に対する疑義が湧いてきたからである[48]。

そして，この背後には，ユダヤ人教会と異邦人教会とのあいだの勢力争いがあり，それは同時に，「ペトロやヤコブ」と「パウロやバルナバ」とのあいだの勢力争いでもあった。このように考えると，ガラテヤ1：1において，パウロが自らの使徒職をこれほどまでに表示しなくてはならなかった歴史的状況があったことが浮かび上がってくるのであり，彼の使徒職の示威的なまでの表示の仕方は，使徒職をめぐるパウロの闘いというものが単なる絵空事ではなく，初期キリスト教史における生々しい権力争いの一環であったことに起因するということが理解されるのである。

それゆえ，パウロは自らをエルサレム教会やアンティオキア教会という「権威的教会」から（ἀπό）派遣された「使徒」ではなく，ましてペトロという「権威的代表者」によって（διά）「任命」された「使徒」などではないと宣言したと考えられるのである。すなわち，エルサレム教会とアンティオキア教会およびペトロに代表される「人的権威／権力」を真正面から否定することによって，パウロは自らがそれらの「人的権威／権力」にいささかも従属するものではなく，ペトロを筆頭とする使徒たちと同じように，パウロ自身もまたイエスと神によって直接に「任命」された使徒であると宣言しているということである[49]。

5．まとめ ── ガラテヤ1：1の修辞的機能とパウロの使徒職の真正性

5.1．ガラテヤ1：1の修辞的機能

修辞的分析を通して明らかとなったガラテヤ1：1における修辞的機能は，以下の通りである。

(1) 書簡劈頭に「パウロ，使徒」という二語が置かれ，それにつづけて二重否定と二重肯定を置く文体は，他のパウロ書簡とは一線を画す異様とも言えるものであり，したがって「パウロ，使

[47] なお，Borse, *Galater*, 44は，「派遣と任命はむしろイエス・キリストと神に遡源する」と指摘しいている。

[48] 詳しくは，拙論「ガラテヤ書1章1-5節の文学的・心理学的分析」54-55頁参照。

[49] Mussner, *Galaterbrief*, 45は，「かの古使徒たち」(die Altapostel＝ペトロなどの昔からの使徒）と同じように，パウロは自らの使徒職をイエス・キリストと神から直接受けたものであると述べていると指摘する。

徒」という二語は，「パウロ＝使徒」（パウロこそが使徒である）ということを鮮明に読者に印象付ける機能を有しており，そのことからパウロが自らの使徒職を修辞的に強調していることが理解できる。

(2) 「人々からではなく，人によってでもなく」という二重否定は，冒頭の「パウロ＝使徒」という修辞的強調をより効果的なものとし，パウロはこの二重否定を前面に押し出すことによって，自らの使徒職の真正性を否定面から逆説的に強調しており，この背後には自らの使徒職の人的関与を完膚なきまで否定することを目的とした修辞的戦略があったものと想定される。

(3) 二重否定によって導入される「イエス・キリストと父なる神による」という二重肯定は，自らの使徒職の人的関与の二重否定（全否定）を正当化するために持ち出されたものであり，したがって「イエス・キリスト」と「神」という二重肯定の主要な役割は，コリントの二書簡のように，その神的根拠を明示するという肯定的なものというよりは，自らの使徒職の人的関与を否定するための修辞的効果を狙うことにより比重が置かれていると言えるであろう。

(4) パウロは，二重肯定をより確固たるものとするために，「神がイエスを甦らせた」という原始キリスト教の最古の信仰告白伝承を持ち出して，自らの使徒職の真正性を修辞的に証明する手段として用いているが，それは自らの使徒職の真正性に対する疑義を払い除けるための修辞的戦略に基づくものだと考えられる。

5.2．パウロの使徒職の真正性

ガラテヤ１：１の釈義的考察を通して明らかとなったパウロの使徒職の真正性をめぐる問題は，以下の通りである。

(1) ガラテヤ１：１の「人々から（ἀπό）ではなく」と「人によって（διά）でもなく」という二重否定に含まれるふたつの前置詞は，「から」（ἀπό）が「派遣」を表し，「よって」（διά）が「任命」を意味する。そして，複数の「人々」は使徒を派遣することのできる「権威的教会」を意味し，このテクストでは「エルサレム教会」と「アンティオキア教会」のふたつの代表的教会が含意されており，単数の「人」はこの時代の「権威的代表者」を指し，それは使徒職を代表する使徒，すなわち十二弟子という後の十二使徒を代表するイエスの一番弟子ペトロその人を措いてほかにはいない。

(2) 「人々からではなく」と「人によってではなく」という二重否定は，前者がエルサレム教会とアンティオキア教会という「権威的教会」から派遣された使徒ではないということを明示し，後者はペトロという「権威的代表者」によって任命された使徒ではないということの宣言であり，この二重否定によって，パウロは自らの使徒職には，いかなる人的関与も存在してはいないということを表明している。

(3) 「イエス･キリストと彼を死人たちのなかから甦らせた父なる神による（διά）」という二重肯定は，そこに含まれる前置詞 διά が「人によって（διά）」の διά と同じであることから，この διά も「任命」を意味すると考えられ，その「任命」の神的根拠としてイエス・キリストと神が引き合いに出されているものである。また，ガラテヤ１：15-17 の内容と併せて理解すれば，ここでの「任命」とは，パウロにとって啓示を受けた「召命」（幻視体験）が，そのまま使徒職への「任命」でもあったというパウロの使徒職に関する自己理解を述べているものと思われる。

(4) この背後に想定される歴史的状況は，ユダヤ人教会と異邦人教会とのあいだの勢力争いであり，それは同時に「ペトロやヤコブ」（エルサレム教会）と「パウロやバルナバ」（アンティオキア教会）とのあいだの勢力争いとしても顕在化し，ユダヤ主義者の影響によってパウロの設立したガラテヤの諸教会にパウロの福音と使徒職の真正性を疑う者が現れるに及び，パウロは自らの使徒職が，かの古使徒たちと同じように，直接イエス・キリストと神から任命を受けたものであり，そこにはいかなる人的関与も存在してはいないということを主張する必要に迫られたものと考えられる。

5.3．ま　と　め

このようにガラテヤ１：１の背後には，初期キリスト教の生々しい権力争いがあったのである。自らの福音と使徒職の真正性に対してガラテヤの諸教会から呈せられていた疑義について，少なくともパウロの側には弁明と反論をする必要が生じ，本書簡を著したのである。そこには，ユダヤ主義者との対立，エルサレム教会のヤコブ一派との軋轢，そして自他ともに使徒として認められていたペトロを筆頭とするエルサレム教会の使徒たちに対する嫉妬心もあっ

たであろう[50]。

そして，このような複雑な歴史的状況がガラテヤ1：1の複雑な修辞的機能として立ち現れているものと考えられる。ガラテヤ1：1はガラテヤ書の主題とされる1：11-12を先取りして示していると言われているが[51]，もしその指摘が正しいとすれば，ガラテヤ1：1はパウロが告知した「福音」（εὐαγγέλιον）の人的関与を否定し，その福音が神的根拠を持つものであることを前もって示すためのものとなるであろう。

だが，私見では，ガラテヤ書には隠された別の主題があり，それは1：1があたかも本書簡の表題のごとく示しているように，パウロの使徒職の真正性の証示である。したがって，ガラテヤ1：1はパウロの使徒職の真正性を証示するという本書簡の隠された主題としての機能をも併せ持っていると言えるのではなかろうか。

[50] 拙論「ガラテヤ書1章1-5節の文学的・心理学的分析」45-56頁参照。

[51] Dieter Lührmann, *Der Brief an die Galater*, ZBKNT 7, Zürich: Theoligischer Verlag, ²1988, 15; François Vouga, *An die Galater*, HNT 10, Tübingen: Mohr Siebeck, 1998, 18.